

良算の唯識思想の特異性

——撰用帰体の重視——

城 福 雅 伸

一

日本唯識は貞慶（一一五五—一二二三）にその萌芽が見られ、良遍（一二九四—一二五二）から大きく変ったといわれる。³しかし良遍は貞慶から見て孫弟子にあたり、貞慶と良遍の間は現在殆ど不明な状態である。貞慶には良算（——）という極めて優れかつ独創的氣風を有した高弟がいた。良算は從來全くと言ってよい程顧りみられなかったが、良算こそ貞慶と良遍の間の空白を埋める極めて重要な位置にある学僧である。そこで彼の思想を検討し、もって日本唯識の展開の一端を明らかにしたいと考えるものである。

二

良算には『転識頼耶短釈』（東大寺図書館所蔵、以下『短釈』）という著作がある。これはその名の示す通り七転識と阿頼耶

識の關係について論じた問答の論草であり、問者と答者が対立する説を立て論争する形式をとる。

『短釈』では両説の相違もさる事ながら所説に相違の生じる原因ともいふべき考え方の相違への言及が目立つのである。

種子生現行（以下種生現）の時、『短釈』の問者は諸法の種子たる頼耶の相分に阿頼耶識自体分が力を与えて転識の現行があるとし、種子（頼耶の相分Ⅱ用）を親因縁、阿頼耶識の自体分（体）を増上縁とし二因縁をもつて論じるとする。

ところが良算（答者）はこれについて「以¹増上縁²、則³為⁴因縁⁵、恐⁶以⁷未⁸得⁹三至理¹⁰」とし、増上縁と因縁（親因縁）を同様に扱う様な問者の説を批難する。良算は「ラヤ自牒を諸法に望めて実に親因縁¹¹」とするというのである。

表面的にみれば種生現の關係について問者は親因縁と増上縁をもつて説き、答者はそれを否定し親因縁のみで説き得るとする説の対立にすぎないように見える。しかし対立の生じ

る原因を探ると、それは法相唯識の考え方の根本ともいふべき四重出体のいずれを重視し用いるかという見解の相違に根ざしている事がわかるのである。良算は、

摂用婦体 種子即頼耶自体也

と注目すべき事に四重出体中、摂用婦体を用いて所論を展開しているのである。摂用婦体は通常摂相婦性といわれ、本識と種子の関係を論じる時は摂用婦体ともいわれるとされる。法相唯識では本来、性相の決択に主眼がおかれるため四重出体中性用別論の立場によって所論が展開されるのが通規であり、摂用婦体は強調されなかったのである。そのため、問者は答者を難じ、

宗家雖立四出鉢。多由性用別論門。說諸法性相。

と法相唯識では性用別論の立場を取るべきであると主張する。つまり問者の立場こそ伝統説の立場に他ならず、その所論は性用別論門によって論じられていたのである。

ところが良算は「ただ摂用婦鉢の尺にまかせて互為因縁の義を成ぜんと欲す」と述べ、摂用婦体を専らに用いる立場に自らがある事を宣言する。そして

若又許互為因縁之旨。定可摂用婦鉢意。

とし、種生現も現行熏種子も互為因縁の義を論ずならばすべて摂用婦体で論じられねばならぬとまで言い切るのである。

つまり良算の思想は徹底した摂用婦体重視思想と言うべきものである。これは伝統的法相唯識の通規を破ったものに他ならない。

そして良算は問者つまり伝統説の立場に対し真向から批難をあびせるのである。

以四出鉢共是真実性相也。何独以性用別論。為諸法至極。これは性用別論のみを偏重して来た伝統説のあり方に対する痛烈な批判に他ならず、当時としては破天荒な主張であったに違いない。

このように良算は摂用婦体を専らに用いるという伝統的立場を破った極めて特異な思想的立場によって論を展開する。

良算は摂用婦体の説が仮説でなく実義である事を重ねて論じ摂用婦体の説を積極的に教学上に位置づけるのである。そしてむしろ伝統的な性用別論の立場にある問者の説を「性用別論門に因縁の義なし」と退けてしまう。

最後に良算は、上綱（藏俊？ 真興？）も伝承の義より摂用婦体が論意にかなうと言われ貞慶もこの説を存じておられたとしこの二人の訓旨によって『短釈』を著したとする。換言すればわざわざ上綱や貞慶も存じておられるなどと断わらねばならぬ程、摂用婦体を用いる説が当時特異な説であった事が知られるのである。

三

『同学鈔』や貞慶の『尋思鈔別要』（以下『別要』）の「転識頼耶」を見ると摂用婦体が用いられている事が見える。すると『同学鈔』等にも、『短釈』の良算説と同旨の摂用婦体による所論が見られるという事になる。ところがここに不審な点が存するのである。先の検討結果より増上縁を立てるのは性用別論の立場のはずであった。ところが『同学鈔』の所説を見ると「若依増上縁門論摂用婦體義」等とあり増上縁は摂用婦体の立場で論じられると述べているのである。また貞慶の『別要』の「転識頼耶」の所説は不分明ではあるが、問答の答において

以現行頼耶直望転識現行（中略）偏可増上縁と記されており増上縁を用いる性相別論の立場であるかのように見える。が重意云では「論用末婦之辺二者偏増上縁也」とし、さらに

誰言摂用婦体不許増上縁根本功力、不爾爭知摂深源哉。

と、摂用婦体の立場で増上縁が論じられる旨を述べている。この不可解は事は何故起るのであろうか。

『短釈』を見ると

凡於摂用婦体諸教所説不同。

とある事から摂用婦体の解釈自体が当時一定していなかった事がわかる。つまり摂用婦体自体に対する解釈の相違が各説での増上縁と摂用婦体の関係の相違となったと推測される。そこで摂用婦体の各解釈について検討を加えてみる。

まず『短釈』の問者は摂用婦体について「相從仮説の一門」といい、また「摂用了隠用呼鉢立其名也」という。『別要』の末云では摂用婦体とは「能生親用在種子。能生根本在鉢」とし根本と親用を分けて考える傾向が見られる。また「先立置鉢用名其上可有婦義也。婦者讓一留」とされる。以上の事から摂用婦体が「相從」・「用を隠し体と呼ぶ」・「讓る」・「留める」等という表現によって示されている事がわかる。この事から問者等の伝統的立場では摂用婦体とは体と用を前提的に別物として設定し、別物なる体と用について相從する、留む、讓る、隠す等という操作を行う事と理解されている事がわかる。

では良算の理解はどうであらうか。良算は現熏種の時、転識の相分（用）を自体分（体）に望めば「体用不二異」としている。種生現の時も「体用相望既非一異」である故に「摂用婦体種子即頼耶自体」と論じてるのである。さらに「鉢用不二異猶論摂用婦之旨」と述べている。以上の事から良算の摂用婦体理解は、不二不異、非一異、不二異と表現される体と用との関係を前提に成立している事がわかる。さらに「体

用の不異がもし仮設に非れば摂用婦体は実義⁽²⁸⁾と論じている事、問者のような疑問が起るのは「体用不二の旨を説かず似たり⁽²⁹⁾」としている事等から、特に体用の不異、不二の強調に立脚して摂用婦体が理解されている事がわかる。

すなわち良算の摂用婦体の理解は、本来的に体と用は不二・不異であるという考えに基づくため、摂用婦体すれば、体（増上縁）と用（親因縁）という明確な区別自体がなくなるわけである。「用功として自体の因縁を論ず故に汎爾の摂婦に異なる。」（傍点稿考）という所論からもこの事は明らかである。

ところが『同学鈔』等の摂用婦体理解ではあくまでも体と用を別々に考える性用別論的な摂用婦体であるため、用を体に帰しても体の中や背後に体と別物である用が存在するような発想となる。そのために摂用婦体しながらも用を親因縁、体を増上縁とする様な考えが生じたわけである。『同学鈔』や『短釈』の問者、先に見た『別要』の所論は皆この立場と考えられるのである。

以上の事から良算の用いた摂用婦体自体が当時の摂用婦体の考え方の一般と異なる特異なものであった事が明らかとなった。たとえ先述の様に貞慶や上綱が良算の奉じる摂用婦体の考え方を知っていたとしても以上の事から理解の主流をなしていたとは考え難い。良算自身「汎爾」つまり普通の摂婦で

はないと明言している事もこれをよく示す。従来の摂用婦体の考え方では性用別論と基本的発想が同じであるため、摂用婦体を用いても教学に変革を生じ得なかったのである。しかし体用不異に基づく摂用婦体を用いれば柔軟な学説の展開が可能な事を良算は見抜き用いたと考え得る。すると良算により初めてこの摂用婦体重視とその真価の認識と発揮がなされたといえよう。

江戸期の法相宗を代表する大学僧高範（一六五五—一七二三）も転識頼耶について言及しているが、そこでの摂用婦体の理解は良算の所説と同じである。⁽³⁰⁾

良遍の『唯識観用意』では、摂用婦体を用いれば非情の成仏や論廻も説き得るとし、摂用婦体を駆使して教学を飛躍的に発展させた形跡が認められる。良遍の摂用婦体の理解は相従、隠す、などではない。非情も仏智の用であるから摂用婦体するとすべて仏の体そのものになる等と述べている事からわかる様に良算の体用不二、不異に基づく摂用婦体の発想を継承している事は明らかである。

以上の事から良算を境にして摂用婦体の考え方自体の主流が変ったと考えられるのである。良算は従来の主流と異なる摂用婦体の考え方を用い、かつその真価を法相唯識教学上において積極的に見出したからこそ、伝統説と異なる摂用婦体重視という特異な立場を立て得たともいえる。いずれにせよ四重

出体とも真実の性相といい、性用別論偏重の伝統にとらわれない良算の思想は注目すべきである。

日本唯識は良遍から変ったといわれるが、良遍の特異な学説は殆んど摂相婦性（摂用婦体）の立場に拠っている事はすでに指摘されている。^③しかし良算はすでに摂用婦体を重視し、しかも良遍には良算の摂用婦体の発想を継承している形跡が見られた。すると日本唯識は良遍から変ったというよりも、良算から変ったといえるのではないだろうか。少なくとも良算が重視し主張した体用不二、不異の強調に基づく摂用婦体理解の流れが日本唯識を変えた原因の一つと見てよいであろう。

四

良算は伝統説の立場では重きをおけなかった摂用婦体を極めて重視して用いた。そののみならず良算から摂用婦体の考え方自体の主流が変ったと考えざるを得ないのである。体用不二不異に基づく摂用婦体の説に注目し、その価値を見出したからこそ摂用婦体の重視という漸新な立場をうち出し得たともいえるのである。日本唯識は貞慶にその萌芽がみられ良遍から変ったといわれるが、しかし貞慶と良遍の間に位置する良算の思想や法相宗の通規にもとらわれない自由な発想や姿勢自体が変革の要因となったと考えられるのである。

- 1 良遍については山崎慶輝氏、北畠典生氏、太田久紀氏等の諸著諸論文を参考にされたい。
- 2 良算については拙稿「鎌倉初期の法相宗の学僧良算について」（『宗教研究』第二七一号）参照。
- 3・4 『短釈』五―五答、最初の五問答の第五問答の答の意、以下これに准ず。
- 5 『短釈』五―三答。
- 6 『短釈』五―五問。
- 7 『短釈』五―四問。
- 8 『短釈』五―四答。
- 9 3に同じ。
- 10 3に同じ。
- 11 『短釈』十一―四。
- 12 『短釈』尾。高範によると貞慶の意は性用別論門にあったという。（龍谷大学図書館所蔵『成唯識論口伝鈔』第二卷）等参照。
- 13 大正六六、一六一。
- 14・15・16 龍谷大学図書館所蔵『別要』第二卷「転識頼耶」。
- 17 8に同じ。
- 18 7に同じ。
- 19 6に同じ。
- 20・21 14に同じ。
- 22 3に同じ。
- 23 5に同じ。
- 24 8に同じ。
- 25・26 3に同じ。
- 27 8に同じ。
- 28 龍谷大学図書館所蔵『成唯識論訓読記』第二卷参照。
- 29 日藏六八・一八八下。
- 30 山崎慶輝氏稿「良遍の唯識数学の特異性―事理の不即不離に関連して―」（『仏教学研究』第一六・一七号）等参照。

△キーワード▽ 良算、貞慶、良遍、摂用婦体、四重出体

（龍谷大学非常勤講師）